東海女子大学紀要　21（2001）

「頑張り」再考

――家永三郎・南　博・柳田邦男らの拙論への論評から考える――

天沼　香

はじめに

1987年６月、私は『「頑張り」の構造――日本人の行動原理――』と題する日本人のコア・パーソナリティーあるいはエトスを論ずる書物を上梓した。幸いにして、同書は学界のみならず、広く江湖に好評を博し、学界内外で幾多の書評、論評を得ることができた。引用も多数に上っている。

引き続いて、1989年11月、私は同書の続編的な意味合いを有する『日本人と国際化』と題する書物を公刊した。ここでは、日本の国際化状況が進行するなかで、それに関連して日本人の民族性がどのように展開しているかについて論じた。

以降、折りに触れて私は、日本人論、日本文化論、「頑張り」論をさまざまなかたちで発表してきた。しかし、前二著の後続の数々は、個別的・単発的であり、やや全体的なまとまりに欠けていたきらいなしとしない。

そこで、このあたりで本格的に、これまでの拙論に対する代表的な批評、論評を取り上げて論じたり、実際にいかに「頑張り」が日本人の生活の中で多用されているかを見ながら、もう一度、日本人のコア・パーソナリティーとしての「頑張り」について考え直すという趣旨のもとに書かれたのが本稿である。

「頑張り」「頑張る」という日本語の語彙に関して、広範な視座から学問的、包括的に取り上げたのは私をもって嚆矢とせざるをえないが、私以前にも貝塚茂樹、世良正利、荒木博之、多田道太郎といった人びとが日本人の「頑張り」に関して何がしかの考察を加えている[1]。

私の「頑張り」論以降も、私論への論評、拙論を引用するかたちでの「頑張り」論、拙論を焼き直しただけのような「頑張り」論、巷の「頑張り」論、その他が数多く展開されている。そのすべてに触れることは到底、不可能なので、私以降の「頑張り」論等のうちから日本人の「頑張り」について再考するうえで意義深いと思われるもののみをいくつか俎上にのせて考えていこう。

1．家永三郎の拙論への論評から考える

「…そういえば、私も（＝家永）教科書訴訟について、支援者の方々から『頑張ってください』と何度言われたかわかりません。（そうした日常的に多用されている『頑張り』の語を）『民族性』解明のキーワードの一つとして、その歴史的源流を追究し、日本の世界史のなかでの、『周縁』的な存在であったことに求められた御着想は、たいへん興味深く存じました。以下、いくつか私の意見を箇条書で申し上げます。

（一）「国民性」（…）「民族性」という概念は、とかくある民族に不変の固定した特質があるかのような、超歴史的でスタティックな連想を禁じえないものがあります。統計数理

研究所の『日本の国民性』といった、現代の一時点ごとの意識調査の結果にとどまるものを、『国民性』などと呼ぶのは、あまりにも拡大しすぎていますし、他方、和辻哲郎の『風土』などは、地理的決定論にちかい印象を受けます（…）。

私は、戦時下「日本精神」論流行のころに、日本的特質論史を考えようとして、…文献のリストを作ったことがあります。それは江戸時代の漢学者や国学者に始まっており、賀茂真淵の『国意考』など、その代表的なものですが、富永仲基の『翁の文』のように、日本・中国・インドの比較思想論といった、卓見にみちたものもあります。（中略）超歴史的ではないけれど、通時代的な特色があるのは事実ですから、それを歴史的に形成されたもの、また可変可能性を持つものとしてとらえるかぎり『民族性』を考えることには、私も賛成です。

（二）その点、貴著は、『頑張り』を『日本民族のコア・パーソナリティー』とされながら、それを歴史的に形成されたものとして、その由来を究めようとされているのは、方法論的に正しいと思います。そして、それを、『原始共同体における水田稲作農耕のあり方』に求められたのは、はからずも、そのかぎりにおいて、私が一九六〇年代はじめに考えていたことと一致しています。…貴著76ページの多田道太郎説を援引しての御高見は、私の…「無限界性」という受けとめ方と、一脈通じています。（後略）

（三）私は、日本文化の問題に限定すると、必ずしも前近代以来『頑張り』がメインカレントであったかどうか疑問に思うところがあるのです。すぐれた日本文化にはむしろ『遊び』の色彩を強く感じます。『遊ぶ』というのは、本来、古代農耕宗教儀礼での、歌舞音曲を意味しましたが、やがて宗教的意味を極度に希薄化させ、あるいはほとんど失なって、現代的な意味にちかいものになって、文化の重要なあり方をになうものとなった、と私は考えます。日本の、否、世界最高の文芸作品といってよい源氏物語に『頑張り』を見出すことはできません。

絵巻物なども『遊び』の要素が濃厚です。貴著引用の李御寧著によれば、『茶の湯をはじめ、能、歌舞伎』がすべて緊張感に基づいているように解されていますが、少くとも茶の湯も、能も、江戸時代に固定する以前は、そんなものでなかったことは明白です。歌舞伎ははじめから『遊び』でした。総じて、江戸時代の庶民ほど『遊び』に長じ、またそれを好んだ人々はありません。狂歌・川柳・黄表紙・人情本などの文芸のジャンルがそれをよく示していますが、特に戦後に林美一氏によって紹介された『仕掛本』（絵本で、絵にいろいろはりこみや二重三重の仕掛けがあって、しかもそこにはほとんどすべて秘戯が画かれているという、およそ『頑張り』とは正反対のおもしろさにみちみちた遊び道具）のごとき、その最大なるものと思います。

近代でも永井荷風などはその系列に入れてよいのではないでしょうか。ただし、これらの文化の生産者享受者が、最高支配層の社会に属するものか、少くとも生活に余裕のある都市民であって、農民の場合は、古代から近代にいたるまで『頑張』らなければ生活に窮するほうが多数だったでしょうから、私の右の引用は、階級を視野に入れると、日本人の通有の特質といえないかもしれません。（後略）」。

（四）（省略）。

以上は、家永三郎の私宛私信中の拙著に対する論評部分の抜粋である[2]。

（一）の部分に関しては、私も家永と見解を共にするものであり、反批判の必要は認めない。（二）の部分についても、家永の考え方と私見との間に大差はない。家永の私見に対する批判の中心となるのは（三）の部分である。

そこで家永は、私が日本の歴史を通じて、原始古代から近現代に至るまで、具体的な発現のかたちは違っても、人びとの間に広く「頑張り」の精神が見受けられるとするのに

対して批判を加える。家永は、すぐれた日本文化の本質を「遊び」に見る。この「遊び」は、「頑張り」の対極にあるものとする。そして、「遊び」の系譜上に位置付けられる『源氏物語』も絵巻物も能、歌舞伎等も、狂歌・川柳・黄表紙・人情本等々も「頑張り」の精神からは程遠いものだったとして、「頑張り」を通歴史的なメインカレントと考える私論に異を唱えるのである。

もとより芸能は、その宗教的色彩を脱色して後には「遊び」の要素を色濃く有するものとなることには、私も異論を差しはさむものではない。もともとから宗教的儀礼的色彩をもたない芸能は「遊び」そのものである。文芸は本来的に時代批評へのひとつの「かたち」であるとともに「遊び」であり、これは時代が変わっても基本的には変わらない事実といえよう。芸能、文芸等が政治的プロパガンダの具とされることなども皆無とはいえないが、少くともそれはそれら本来の姿ではない。

江戸時代、上方や江戸のある程度、裕福な層の町人たちが「いき」「粋」の体現者であり、「遊び」上手であったことは言を矣たない。日本にも文化的にレベルの高い「遊び」の系譜があったことは私も認めるのにやぶさかではない。

が、しかし、家永が私からの反批判を見透かすかのように述べている如く、階級的視点をもってみるならば、そうした「遊び」文化の創造者も享受者も、全体からみるならばごく僅かな支配層、裕福な層に限定されていたのである。大多数を占める貧しい農民層の人びとは口を糊するために、日々、「頑張」らざるをえなかったのだ。

文化や民族性を考察する場合、ともすれば可視性の高い存在に目が注がれがちであるけれども、その全体を見はるかすためには、むしろ可視性の低い存在にこそ注目しなければならないと私は考える。このあたりの視座に関しては、可視性の高い存在を重視する恩師、家永三郎のエリート史観と私の民衆史観との懸隔が明確にみてとれるといえよう。

2．南博の拙論への論評から考える

「対人関係の中で日本独特の『頑張り』を論じたのが、歴史学者天沼香の『「頑張り」の構造――日本人の行動原理』である。『頑張り』には二種類ある。一つは、閉鎖的な日本社会の内部で他の集団構成員に負けまいとして発揮される頑張り、もう一つは異国の地で異人を意識し、接触する時に発揮される頑張りである。非日常性の中で民族性はより明確に湧き出してくる。たとえば移住したての日本人移民が、日本在住の日本人以上に日本人的性格をあらわにする。この頑張り、頑張るという言葉は他国語に直訳できない。本来の『眼をつける、見張る』という語義から『頑として動かない』といったニュアンスを持つようになったのではないか。日本人は短期間の頑張りを発揮する代わり、長期間の『ねばり』には弱い。…熱狂的になりやすく、一方向へ群れて走りだし、抑制が効かなくなる。水田稲作では、田植えと稲刈の時期に労働力を集中的に注ぎ込む必要があり、これが頑張りという日本民族のコア・パーソナリティー形成の源泉の一つなのではないか。日本は後発稲作民族で、必ずしも稲の生育に適していない気候風土の下で栽培しなければならなかったため、頑張らざるをえなかった。また常に文化の周縁にあり続けた日本は、海外からの文化を移入し、進んだ中心に追いつき追い越せ、と頑張った。近代化を達成した日本民族の精神的バックボーンは、つまるところ頑張りであるとした[3]」。

これは南博が　長らく日本人の生活・文化・心理・行動に関する研究を行ってきたなかで出会った千数百点の日本人論――殊に「国民性」にこだわったもの――のうちから選んだ、近代日本における代表的日本人論の遂一に関して、そのエッセンスを抽出した作品のなかの拙著への言及部分である。

他の論著への言及部分同様、拙論に対しても南は批判を加えることを控え、その言わんとしているところを簡明に伝えようとしてい

る。その意味で、この南の文章は、拙著のさまざまな「頑張り」の例示の部分や、日本人がなぜ「頑張る」のかを論証した部分等を省いて、結論的な部分を忠実に抜粋した超ダイジェスト版といえる。

しかし、南が傍頭で「対人関係の中で日本独特の『頑張り』を論じた」と拙著を許しているのは、社会心理学者らしい捉え方で示唆に富む。前述の家永が拙著に対して歴史学者らしく文化史的視座から批判するのとは全く異なった視点からの評で、筆者としては自らの論を精緻化する端緒を与えてくれた一文という認識をしている。彼は上記の文章の後に私が拙著で展開した「『頑張り』には二種類」がある旨を紹介しているが、その後、私は日本人の「頑張り」は3つのタイプに分類して考えたほうが、その意味内容をより正確に把握できるのではないかと考えるようになった。

このように私が「頑張り」について再考するきっかけをもたらしてくれたのが、南博の拙著への評だったのである。「頑張り」の3タイプについては後で触れることにしよう。

3．柳田邦男の私論への論評

「…『頑張れ』というかけ声を日常的に使うのは、日本人独特の意識構造と関係があるのかもしれない。

東海女子大学文学部の歴史人類学研究者・天沼香助教授（当時）は、『頑張る』という言葉が日本人の生活や仕事のどういう場面で、どのように使われているのかについて、豊富に事例を集め、その意識と行動について分析した結果を『「頑張り」の構造』（…）という本にまとめた。

天沼助教授はそのなかで、「日本人はなぜ『頑張る』のか」という点に問題を絞りこみ、歴史的、文化論的な視点からの分析によって、『頑張り』の精神を日本人のコア・パーソナリティー（国民性の中核をなす特性）の一つとして位置づけている。そして、日本の近現代史においてこの言葉が果たした役割を重視し、『頑張り』の精神は明治維新以降の日本の急速な近代化を推進する力となった反面、いつしか『頑張れば何とかなる』という幻想を醸成し、日本人を無謀な大東亜戦争に駆り立て、特攻作戦までも生み出したと指摘している。

この『頑張り』の精神構造がいまでも日本人の意識のなかに生きていることは、日常生活のなかでその言葉の使われ方を見ればわかる。天沼助教授は、闘病における『頑張り』についてまでは論じていないが、闘病の場でも、この言葉はなんと安易に使われていることか[4]」。

柳田のこの文章は、27歳11カ月で生を終えた「頑張りやさん」の看護婦の最後の日々を描いたノンフィクション作品のなかに登場してくる。仕事熱心で律儀でいつでも「頑張っている」彼女は、最後の病床にあっても、「頑張る」ことを止められないでいた。重病患者なっても《やっぱりいい看護婦であり続けようと頑張っている》[5]。そう感じた彼女の看護学生当時の教育担当婦長は、彼女を見舞い、その痛みの宿る背中を撫でながら《…貴女は十分に頑張った。もういいのよ》という思いを伝えるべく、「辛いときは、そんなに頑張らんで、泣いたらいいんよ」[6]と言った。

その言葉を待ち受けていたかのように彼女は泣き崩れ、やがて涙とともに「頑張り」一辺倒だった彼女の心は解き放たれていった。二週間後、彼女は安らかに永遠の眠りに就いた。

彼女の人生最後の通過儀礼が終わってほどなく、彼女の母親が病院に件の元教育担当婦長を訪ねて礼を述べた。「娘が亡くなる二週間ほど前だったでしょうか。…娘の見舞いに来ますと、それまではいつも私のことを気遣って気を張っていた娘が、とても穏やかな顔でこういったのです。『好きな先生がいいはったけど、辛いときは頑張らんで泣いてもいいんやて』と。

娘は一家の大黒柱の父親を亡くしてからは、

私のために頑張らなければと、病気になっても涙ひとつ見せずに闘病しておりました。でも、あの晩は…私の前で泣きました。そして『お母さんも頑張ってばかりいないで、辛いときは泣けばいい』っていうんです。…その夜は、病院に泊まり、娘を抱いて一緒に泣き、一緒に寝てやりました。それからというもの、娘はすっかり私に甘えて過ごすようになりました。…仰言ってくださったことを、娘はほんとうにうれしく思っていたようです。ありがとうございます[7]」。

「頑張りや」の教え子をギリギリのところで「頑張り」から解放した元教育担当婦長のバックボーンは、米国テキサス州ヒューストン、MDアンダーソン病院でのガン看護体験だった。そこで、ケースワーカーと重症ガン患者たちそしてその家族たちの会合に参加し、参加者が苦悩を吐露し合い、涙を流し合い、語らうなかで、個々の悲しみや苦しさが柔らいでゆくことを彼女は眼の当りにしたのだった。

《長い人生において、誰しも受け入れ難いことに遭遇するときがある。…頑張ろうとしても、乗り越えられないときもある。そんなときには、…タテマエを取りのけて、あるがままの自分を受容しないと、挫折してしまう。涙というものは、頑張りをはずし、無理のない自然な自分を再生させる…[8]》その時、彼女はこんな風に思ったという。

このような医療の現場、ターミナル・ケアの現場における人間のありよう、人間関係を具さにみるなかで柳田は「『涙』の対極の『頑張る』という、日本人の国民性の中核にある意識[9]」を深く意識せざるをえなくなり、多分、そのゆえに私の著作にも接することになったのであろう。

柳田のいう通り「天沼助教授は、闘病における『頑張り』についてまでは論じていない[4]」。が、その後、さる大学の医学部に属して社会科学と高齢医学・社会医学の学際的領域を渉猟することになった私は、この柳田がいみじくも提示してくれたテーマに直面せざるをえなくなった。

確かに多くの日本人は、病に患っている他者に対して「頑張ってください」「頑張ってね」「頑張れ」という。私も病室で見舞客（知人、友人、家族等）が患者に対して「じゃあ、頑張ってね」と気易く別れの挨拶代りの言葉を残して去っていくのを幾度となく耳にし、目にしている。治癒する見込みの高い患者に対しては、「頑張って」は有効な言葉である。その激励に呼応して、患者が「よし、頑張ろう」と回復への意欲、生への意欲を燃やせば、回復は早まる可能性がある。免疫機能が向上して、症状が軽くなることも考えられよう。

孤独に弱い人間にとって、「ひとりじゃないんだ。励ましてくれ、自分を認めてくれ、必要としてくれる人がいるんだ」と実感することは何よりの励みになる。まして病気に犯され、気弱になっている時なら尚更である。

こうした際における「頑張れ」「頑張って」は、日本人間の人間関係をより強固にする意味合いをも有する貴重な言葉といえよう。だが、治癒する見込みの低い（あるいは、ない）患者に対しては、この言葉はほとんど禁句と言っても言い過ぎではない。

闘病、闘病生活といった言葉があるが、「病と闘う」のも、治る可能性があればこそ、であり、「病と闘う生活」も治って元通りの（ような）生活に戻れる可能性が高ければこそ、その苦難に耐えうる。しかし、治癒の可能性のない（あるいは、低い）病気の人に「頑張って」「頑張れ」と闘病を強いるのは酷としか言いようがない。

ただでさえ辛い日々を送っている末期患者は「頑張って」といわれても、「この上、何を、どう頑張ればいいのか」と戸惑い、落ち込むばかりである。むしろ、まつわりつく「頑張り」意識から解放してあげることが肝要である。それこそ、先の元教育担当婦長が末期ガンに犯された教え子の若い看護婦に「辛いときは、そんなに頑張らんで、泣いたらいいんよ[6]」といいながら温い手を差しの

べたように。

「頑張れ」は、精神的に落ち込んでいる人、引きこもりの症状を呈している人、不登校児、うつ病患者、うつ的な症状を呈している人等に対しても禁句である。「頑張れ」ない状況にあるから、そうした症状を呈しているのであるから。

これらの症状を呈する人は、往々にしてそもそも「頑張り」屋で、一所懸命に「頑張っ」たにもかかわらず所期の成果が挙がらずに落ち込むに至ることが多い。そこへ「頑張れ」というのは、落ち込んでいる状態に追い打ちをかけるようなものだからである。

4．折橋徹彦の拙論への論評から考える

「日本人の行動原理を『頑張り』という日本人のコア・パーソナリティーに見るという試みは、日本人論の視点を、より現代の認識として有効なものとするために意味のあることのように思われる。危険な体質を制御できるのは高度で説得性のある認識の他に無い。著者は個人的な体験から『頑張り』という言葉のもつ意味に日本人特有な行動様式を見てとる。（中略）

著者（＝天沼）は『働いてないこと」『何もしていないこと』などに積極的な価値を付与しない、空白な時間に耐えられない日本人の精神構造の起源を探り、これを『アジア的形態』をもつ原始共同体の水田稲作農耕のあり方に求め、それが日本的文化空間を基本的に性格づけたとする。日本の稲作農耕にある『ある時期に労働力を集中的に注ぎ込む』ことが頑張りの起源となり、それが日本民族のコア・パーソナリティーのひとつとなる。明治以降、近代資本主義社会に移行していく中で、産業構造が変化し、『共同体』はその規制力を失うが、生活、意識面で『頑張り』をエトスとした擬似共同体（＝私がいうところの『擬似的共同体』に該当する…引用者注）的な規制が残る。

…明治以降に先進文化の移入が急進展し、これが（日本の）文化と社会に歪みを与えた。この急進展のエトスが頑張りである。近代日本の成立に際して為政者は上下の隔絶はないという幻想を民衆に抱かせるような政策を実施し、頑張れば誰でも（社会的、経済的に）上昇できるという幻想を強化した。（中略）

…この問題をより科学的に扱うことを意図した著者の立場を超えて、やや主観的に読みとるならば「頑張り」は主体性を欠落させてしゃにむに一定方向に突き走らす危険性を持った日本人のコア・パーソナリティーである、と結論づけることが出来るのではなかろうか[(10)]」。

折橋は、私の論は「日本人論の視点を、より現代の認識として有効なものとするために意味のあること」と評する。確かに私は近現代における日本の状況との絡み合わせのなかで日本人のコア・パーソナリティーとしての「頑張り」を論じた。しかし、その真骨頂は、民族性を「歴史のなかで培われたもの」として捉え、＜日本人は何故、頑張るのか＞という命題を原始古代から近現代に至るまでの日本史の流れのなかで浮き彫りにすることであった。

私は仮説として、日本人の「頑張り」の源泉を縄文晩期ないしは弥生初期以降、日本人の主たる生業となった水田稲作農耕に求めた。詳しくは拙著に譲るが、日本原生ではない、熱帯あるいは亜熱帯原産の稲を栽培種として育成し、それを主食とするには、共同体的規制のなかで「短期的・集中的に米作りに力を傾注する」ことが必要不可欠であり、この短期的・集中的な力の傾注こそが日本人の「頑張り」の源泉ではないかと考えたのである。

その後の日本も、世界文明史的視座から見るならば、常にその時々における中心的存在の周縁に位置していた。原始古代から中世にかけては中国、中世末期には南蛮諸国、鎖国を経て近代以降は西欧諸国、第二次世界大戦における敗北以降は米国というように、各時代毎に周縁としての日本に対して、かなり大きな影響力をもつ文明の中心があった。

であるから、私は日本の歴史は、それぞれの時代に、その時々の中心を志向して、自らの文化を発展させてきた○○化（○○ナイゼイション）【すなわち中国化（チャイナナイゼイション）、南蛮化（ナンバナイゼイション）、西欧化（ウェスタナイゼイション）、米国化（アメリカナイゼイション）】の連続の歴史として鳥瞰することができるのではないかと考えている。

この中心に追いつき追い越せといわんばかりの各時代における○○化こそが、各時代における日本人の「頑張る」意識を高揚させ、定着させて、遂にはそれを通歴史的な日本人のエトスとなした一大要因とみるのである。

その最たる時期が日本近代であった。すさまじい近代化の進展のなかで、明治新政府は、より広範な層から近代天皇制国民国家創成に必要な有為な人材を確保するために、「頑張りさえすれば誰でも何とかなる」という限りなく幻想に近い施策を行った。この幻想と○○化（この場合は西欧化）が相まって作用して、日本人が持続的に保有してきた「頑張り」という民族的なエトスは、より顕在化して日本人のコア・パーソナリティーとなっていったのである。

この「頑張り」に関して折橋は私論への論評の結論部分で、「…科学的に扱うことを意図した著者（＝天沼）の立場を越えて」と前置きをして、「頑張り」は主体性を欠落させて遮二無二、一定方向へ突走ってしまう危険性を持ったコア・パーソナリティーと結論付けている。しかし、これは元々、私が「頑張り」の否定的な面として強調したことである。

「頑張る」性向は、時に「頑張ってさえいればそれでよい」といった、視野の狭いエゴイスティックな思考にもつながる。また「頑張る」のではなく、主体性を欠落させたまま「頑張らされる」ことも多々あったのだ。

他方、「頑張り」は日本近代化の精神的バックボーンであったことも事実である。日本人そして日本は世界文明史上、いつの時代も周縁の民族であり、周縁の国家であったがゆえに、妙なプライドに邪魔されることなく海外の先進文明を摂取し続けることができた。これは自文化の独自性という点において多少、難ありといわざるをえない。が、それゆえに常に二番手、三番手につけることができ、したがって比較的スムーズに近代化を成し遂げ（勿論、大きな歪みを内包しながらではあったが）、植民地化も免れた。そうした状況の基底に民族のエトスとしての「頑張り」があったことも否めない事実である。

このような「頑張り」の肯定的な面も見落としてはならない。畢意、「頑張り」というエートスは構造的に二律背反するものを二つながら持ち合わせているといえよう。

いずれにせよ、私は折橋ほどには「頑張り」を否定的にばかり捉えようとは思わない。功罪半ばする日本人のコア・パーソナリティーあるいはエトスであると考えている。

5.「頑張り」を育む「努力差」重視社会

中根千枝は、その著『タテ社会の人間関係』[11]において次のように述べている。

> 会社によっては、同年にはいった者たちが「同期生の会」というのを…つくっている。これはいっそう会社内における先輩、後輩の序列をはっきりさせる役割をもち、年功序列をますます助長させる結果となっている。同期生の一人が抜擢されると、同期の者はすべて「あいつがなるんだったら、われわれだって」という気持にかり立てられ、大騒ぎになる。
>
> この驚くべき序列意識に対しては、会社側はたとえ近代的管理法といわれる能力主義を打ち出したとしても、たじたじとならざるをえない。筆者（＝中根千枝）のみるところ、日本人の「オレだって」という意識は全く世界に類例をみないほど強く、自己に対する客観性をミニマムにしている。

中根のいう、こうした「同期生の会」的な

存在は、会社組織もさることながら、官僚機構などではより一層、顕著に見られるものである。もっとも彼女が「日本＝タテ社会」論を展開した20世紀半ばの日本の社会状況と、21世紀の今日の社会状況とでは大きな相違も見受けられるけれども。

彼女の指摘する日本の会社組織等における年功序列といった特性（と思われていたもの）も、他の日本的経営の特性（と思われていたもの）、すなわち終身雇用、企業内組合、長期系列取引き等の慣行ともども今日では崩壊しつつある。

日本経済の停滞状況が常態化し、日本企業の国際的な競争力が弱まるなかでは、各企業とも好況時のように、鷹揚な思いやりのある上記のような慣行を踏襲しているわけにはいかなくなってきた。各企業が大量の人的リストラ、経営基盤の縮小を迫られているなかでは、終身雇用制、年功序列制といった日本的雇用慣行の維持は極めて難しくなってきている。

現に20世紀末から21世紀初頭にかけて、日本を代表する企業が次々に何千人、何万人という規模の人的リストラ策を打ち出し、労働者の側も退職金を割増しした勧奨退職に応ずるといった光景も珍しいものではなくなってきた。わけても、以前なら中核的な企業戦士として、自他共に認めていた4、50歳代の会社員（多くは、それこそ年功序列制によって中間管理職になっている）が、窓際に追いやられたり、人的リストラの標的にされたりしているのが、この時期の特徴である。

1990年代前半のバブル経済崩壊以降の構造不況下において、かつての大蔵省主導下の金融機関の「護送船団方式」といわれた横並び一線のあり方が瓦壊していき、かつての通商産業省主導下の「ニッポン株式会社」が解体を余儀なくされていくなかで、日本経済のあり方、企業経営のあり方は大きく問われることとなったのである。

しかし、このように状況が大きく変化を遂げたからといって、日本人の民族性――コア・パーソナリティーまでが、状況に追随して急変することはありえない。逆にいうなら、「おのおのの民族の悠久の歴史上の一時期に展開したある時代相のなかで一過性的に忽然と現われ、次の時代相へ転回していくなかで消滅していくような文化慣習は、一つの時代相を彩るものではあっても、基底的な民族性を構成する要素とは認定しがたい。あらゆる時代相を貫徹して存続しつづけてきた文化慣習こそ、各民族のコア・パーソナリティー[12]」として認識すべきといえよう。

目下、問題にしている日本人の序列意識にしても、これは歴史的に長らく日本社会のありようを規定してきたものとして、そうおいそれと急激に変化するとは思われない。まして、企業のありようは変わらざるを得なくとも、可視性の高い日本的社会システムの代表格たる官僚機構は腐臭を放ちながらも微動だにしていないのだ。

キャリア、ノンキャリアの厳別をはじめとして、ここではルース・ベネディクトの指摘する「階層」と「序列」[14]をベースにした安寧秩序が厳然と保たれている。しかし、そうした場でありながら、官僚機構においては、さながら戦前・戦中の日本の軍隊において、稀ながら兵・下士官から士官になる道が開かれていた[15]のと同様、稀にキャリアのポストにノンキャリアが就くこともある。またノンキャリアの不平不満の解消策としてであろう、省庁内の利権絡みのポスト、小金を自らの採量で動かせるポスト等にノンキャリアを就ける。

こんなところから、キャリアは局長・次官レースの勝者となるべく「頑張り」、ノンキャリアもそれなりの地位を目指して「頑張る」ことになる。

もちろんノンキャリアがキャリアのポストに就くことは全体から見れば稀有なことであり、戦前・戦中の軍隊組織において稀に兵・下士官が士官になることがあったことと同様、ほとんど幻想に過ぎない。けれども、こうした軍隊組織や官僚機構といった近代国民国家

の枢要な位置を占める社会システムが「階層」と「序列」を重視しながら、他方で稀有な事例をもって「(兵・下士官、あるいはノンキャリアの）君だって頑張れば何とかなる（一定限の地位、名誉、金等を手にすることができる)」という幻想に限りなく近い事実を提示していたことの意味は小さくない。

この限りなく幻想に近い事実が、何ほどか近代日本人の「頑張り」を支えたであろうことは想像に難くないからである。幻想が「君だって」とささやけば、近代国民国家日本のささやかな一員たちの自意識は「オレだって」(「われわれだって」) と呼応するであろう。

この自意識が日本人の「頑張り」の精神のひとつの基底をなし、近代日本の急速な発展のメンタルな面でのバックボーンを成したのではないかと私は考えている。「頑張り」の精神を日本の近代化のエトスと考えている所以である。

ただし私は、中根のような「日本人の『オレだって』という意識は…世界に類例をみないほど強く、自己に対する客観性をミニマムにしている」といった日本人観に与するものではない。世界の諸民族と比較して日本人の「オレだって」意識が隔絶して強いとも思われないし、日本人の自己評価の客観性が取り立てて低いとも思われない。むしろ歴史的に見れば、諦観をも含んだ日本人の自己観照には客観的な鋭いものがあると言わざるをえない。しかも、これはそうした面における可視性の高い人びとの自己意識に関してのみ言えることなのではなく、可視性の低い人びとの間の意識としても認識できるのである。

中根はまた次のようなことを強調する[16]。

> 能力主義をとる場合には、個々人の能力差を克明に判定する必要が生じ、それに対応するメカニズムが…要求されるのであるが、日本社会においては、そうした判定法が雇用制度として存在しなかったばかりでなく、一般の人々の生活においても能力差に注目するという習慣は、ほかの諸社会に比べて非常に低調である。
>
> 伝統的に日本人は「働き者」とか「なまけ者」というように、個人の努力差には注目するが、「誰でもやればできるんだ」という能力平等観が非常に根強く存在している。

中根は、こうした「人間平等主義――無差別悪平等（中根の表現)」が、日本人の間では顕著に見られると指摘し、これは「能力差」を認めようとしない日本人の性向に関連するものと判断する。

日本人が一般的に、個々人の「努力差」には注意を払うけれども、個々人の「能力差」には注目しようとしない（「能力差」は認めたがらない、あるいは黙殺しようとする）性向を有することは、私も認めるところである。

日本で『尊敬する人』とされた人びとの多くは――例えば二宮金次郎や野口英世のように――、貧しいなかで苦学力行、努力を重ねて、人の役に立つ人物になった、といった類の人びとであることからも、日本人が人に倍する努力を行った人を高く評価する――すなわち「努力差」を認める存在であることは推し量られよう。

そして、こうした性向が昂じれば、結果はどうあれ（たとえ失敗に帰したにせよ、上々の成果が得られなかったにせよ)、そこに至る過程で「努力した」こと自体が一定の評価を得ることになる。

能力は、本来的には個々人が出した結果によって判断されるものである。けれども未だに日本における枢要な社会システムにあっては、最終的な結果が個人の責任に帰せられることは極めて少ない。そのあたりは、きわめて曖昧に処理されてしまう。個人の能力の欠落が厳しく追及されることはなく、何となく、集団全体の連帯責任といったところに落ち着いて行く。

私は、このように日本社会においては、結果に関連する能力よりも、その結果に至るまでの過程に関連する努力が重視されるところ

に、日本人の「頑張り」が発揮されるひとつの基盤があるのではないかと考えている。結果にまつわる「能力差」よりも、その結果を出すまでのプロセスで「いかに努力したか」という「努力差」が問われるとなれば、努力していることを示すべく大いに「頑張る」ことになる。

日本人が「頑張る」背後には、「能力差」よりも「努力差」のほうが称揚されるという社会規範が横たわっているのではないだろうか。

6．日本的人間関係を規定する「頑張り」

日本では、日常的な対人関係のなかで「頑張り」「頑張る」という語彙に接する機会が非常に多い。野球、相撲、サッカーその他諸々のスポーツ界の選手や芸能界の人びと等が、インタビューを受けた際の締めくくりの言葉として「頑張ります」ということなど日常茶飯事である。受け手がそういう前には、インタビュアーも「これからも頑張って下さい」とエールを送っている。

「おめでとうございます。これからも頑張って下さい。」
「はいっ、頑張ります。」

これは、もうヒーローインタビューや受賞後のインタビューの定型になっていると言っても過言ではない。上のような問答でインタビューが終ると、きちんと話が落ち着くところに落ち着いたような感じになり、不特定多数の聞き手も何となく納得したような心地になる。日本人の多くを納得せしめるインタビューの「落しどころ」といえようか。

そこでは最早、何をどう「頑張る」のかは問題ではない。形式化したあいさつ言葉になっているとさえいえよう。こうして日本人がこの言葉を日常的に多用するので、来日した外国人も「頑張る」を重要な日本語の語彙として認識する。

大相撲の東関親方（元関脇高見山）も現役時代には折りにつけ、「ガンバリマース」と言っていたし、2001年度、パシフィック・リーグの覇者近鉄バッファローズのホームラン王、タフィ・ローズ選手も「ガンバリマス」はお得意だった。2002年、サッカーのワールドカップに向けての抱負を締めくくるトルシエ監督の言葉も「ガンバリマス」だった。

私の勤務する大学に赴任してきた英語教師S氏の教授会での初めての挨拶も、その後の得意とする日本語表現も「ガンバリマスノデ、ヨロシクオネガイシマス」（原文日本語の通り）であった。日本で活躍する諸外国人の間でも、「ガンバリマス」「ガンバリマショウ」は、日本社会に溶け込むための合い言葉といった共通認識が存在するかのごとくである。

日本の会社の就業前の朝の会合でも「今日も一日、頑張ろう」。労働組合の大衆団交、デモ、ストライキ等に際しても「要求貫徹、ガンバローッ」。受験生に対しても「頑張れ」。結婚式でも新郎、新婦それぞれに「頑張って下さい」。政党の選手出陣式や党大会でも「頑張ろう」。スポーツの遠征チームの結団式でも「頑張ろう」。このように、大小、ハレ・ケを問わず、日本人の人間関係のなかで「頑張ろう」「頑張れ」等、「頑張る」の各活用形は縦横無尽に使用されているのである。

私は、毎年、ある高校生向けの読書感想コンクールの審査委員をしている。高校生の書く『老人と海』、『人間失格』、『五体不満足』、その他諸々の書の感想文のなかに例年、かなり頻繁に登場してくる語も「頑張る」である。いわく「精一杯がんばった」「頑張っていきたい」「最善を尽くして頑張る」「頑張って生きる[17]」等々。

これら高校生の作品中の「頑張る」を分析的に把握すると、その用法はきわめて「頑張る」の本来的な意味合いで使用されていることがわかる。すなわち本来的な「我ニ張ル」という自己に密着した、自らを鼓舞する意味合いで「頑張る」の語を用いているのである。

読んだ本の内容と自らの人生とを何らかの

かたちで結びつけて論ずることが、当該コンクールのひとつの眼目であるから、自らの個に引き付けて「頑張る」の語を登場させているのは当然といえば当然ではある。

しかし、昨今では、この「頑張る」の本来的な用法とともに、その派生的用法も多用されるようになってきている。先に触れたような挨拶代りのような用い方も多い。また個ではなく、集団で全体として「頑張ろう」という、「頑張る」の本来の意味合いである「全体の意に対して、個として異をを唱える＝我を張る」意をまったく逸脱した用い方もごく一般化している。

このごろでは、保育園の運動会での園児に対する指導に際しても「みんなで『頑張れ』[18]」ということで、リレーなどでも勝ち負け云々、他者を蹴落すことに関心を持たせるのではなく、チームのみんなで「どれだけ知恵を絞り頑張ったか、その過程を尊重する[19]」ことに重きがおかれているという。

小学校の運動会でも近頃は、駆けっこで1等、2等といった評価を止めて、みんなが一所懸命走ったこと（努力したこと）を評価しようといった風潮が強まっているのも同様の発想からでているものであろう。結果よりも、結果に至るまでのプロセスにおける努力＝「頑張り」を重視したものといえる。

こうした風潮は、前節で言及した日本社会における「能力差」よりも「努力差」を重視する傾向とものの見事に重なり合う。ともすれば「能力差」を云々することは「差別」としてタブー視され、「誰だって努力すれば…」として、結果についても「能力差」のゆえではなく「努力差」のゆえと考えられる。

であるから2001年9月、ベルリン・マラソンで高橋尚子が世界最高記録で優勝した時にも、彼女の「能力」よりもそのたゆまぬ「努力」が称揚されたのだった。

そして、この「誰だって努力すれば…何らかを達成できる」という日本社会の基底に流れる共同幻想こそが、日本人の「頑張り」を育んでいるのである。

しかも、「頑張り」は、個としての日本人の行動規範となっているだけでなく、「共に頑張ろう」ということで、集団ないし全体としての日本人の行動を規定するものともなっている。この「共に頑張ろう」という認識は、競争的同調性という日本的な人間関係の基底をなすものとしても重要な意味合いを有するとも考えられる。

この人間関係、対人関係を規定するものとしての「頑張り」について、以下に少々、分析的に捉えておこう。

7.「頑張り」「思いやり」の発現のしかた

日本人のコア・パーソナリティーは「頑張る」ことと、「思いやる」ことに集約されると私は考えている。

日本人は〈他者〉に対して、並びに〈他者〉ともども「頑張り」、〈他者〉を「思いやる」性向を強く有していると考えるのである。

ただし、この際の〈他者〉とは、基本的には不特定多数の匿名的な〈他者〉を意味するものではない。あくまで、何らかのかたちで自らがそこに属する（あるいは帰属感をもつ）集団内の〈他者〉を意味する。この場合のそことは、さまざまなレベルの自らの帰属集団、すなわち自らの家族、自らの通う学校、自らの職場等を指す。

このそこは、時に自らの家族、学校、職場等の存在する「ふるさと」やその地方公共団体そして「国家」（日本の場合、これはほとんど「近代国民国家」を意味する）等にまで敷衍される。

そうなると、集団内の〈他者〉とはいえ、必ずしも日常的にフェイストゥフェイスの関係性を有する〈他者〉とは限らないことになる。けれども個々が思いやる存在は、やはり日常的に面識のある、しかも親しい関係にある「ウチ」なる関係性を有する人びと、「ミウチ」的な存在の人びと、すなわち〈ウチなる他者〉を意味しよう。

日本人が「思いやる」〈他者〉とは、まさにこの〈ウチなる他者〉であって、けっしてさまざまなレベルでの自らの集団外の〈他者〉、すなわち〈ソトなる他者〉にまでもあまねく及ぶものではない。しかし、かつて日本の民俗慣行として一般的に見られた客人歓待の意識のように、時に〈ソトなる他者〉に対しても「思いやり」は発現することもあった。この「思いやり」に関して詳しくは別稿に譲ることとする[20]。

日本人の「頑張り」は、集団内における二つのタイプの「頑張り」と集団外に対する一つのタイプの「頑張り」とに三分類することができる[21]。①集団内の〈ウチなる他者〉に負けまいとして発揮される「頑張り」、②集団内の協調的な人間関係（あるいは同調的な人間関係）のなかでの「頑張り」、つまり〈ウチなる他者〉同士、「共に頑張ろう」といった意識のもとでの協調的（ないしは同調的）な「頑張り」と、③〈ソトなる他者〉に対して発現する「負けるものか」といった意識のもとでの「頑張り」とである。

「共に頑張ろう」というもの言いは、「我ニ張ル」からの転であることからも明らかなように、本来は個に密着した行動であるはずの「頑張る」という営為が、近代に入っていずれかの時点以降、徐々に、集団ないし全体の営為をも示す言葉に転化していった[22]ことにより初めて可能になった表現である。このように、すぐれて個に帰属するはずの営為だった「頑張り」が、集団そして全体をカバーする営為を意味するまでに敷衍されたところに、この語が今日まで命脈を保ち、国民的支持を得ている理由がある。

この集団で、あるいは全体で他者と「共に頑張る」意識が、ウチにおいても、ソトに対しても発揮されるのである。フォルクス・ガイストなどという概念は今では、死語に等しい。が、この全体として、皆で「共に頑張る」人間関係は、まさに近代日本を規定するひとつのフォルクス・ガイストだったと言っても過言ではないだろう。

この稿のおわりに

家永三郎、南博、柳田邦男、折橋徹彦といった各分野の専門家による拙論への論評、言及は、私に改めて「頑張り」を考えさせるきっかけとなった。

これを、今後、より精緻に日本人のコア・パーソナリティあるいはエトスとしての「頑張り」を歴史的、構造的に把握していく端緒としたいと考えている。

[註]

(1) これら諸氏の論について詳しくは、天沼香『「頑張り」の構造――日本人の行動原理――』（1987年、吉川弘文館）62-78ページを参照されたい。

(2) 1987年7月、前掲拙著刊行直後に家永三郎から著者に送られてきた「書評」的文章を中心とした私信。

(3) 南博『日本人論――明治から今日まで』、1994年、岩波書店、259-60ページ。

(4) 柳田邦男『「死の医学」への日記』、1996年、新潮社、25-26ページ。

(5) 同上、15ページ。

(6) 同上、16ページ。

(7) 同上、18ページ。

(8) 同上、22ページ。

(9) 同上、25ページ。

(10) 折橋徹彦の前掲拙著に対する書評、『週刊読書人』、1987年9月21日号。

(11) 中根千枝『タテ社会の人間関係』、1963年、講談社現代新書、73ページ。

(12) 前掲拙著、22ページ。

(14) ルース・ベネディクト『菊と刀』、定訳版第1刷、長谷川松治訳、1967年、社会思想社（原本 Ruth Benedict, "The Chrysanthemum and the Sword, —— Patterns of Japanese Culture" Boston, 1946）

(15) このあたりの事情に関してやや詳しくは、前掲拙著（157-158ページ）を参照されたい。

(16) 中根前掲書、76ページ。

(17) 2001年度、高校生読書体験記コンクール応募作品中の表現。

(18) 「できるかな？　心のリレー　バトンタッチ　いま保育園運動会は――みんなで『頑張れ』」（東京新聞、2001年10月10日付朝刊）。

(19) 同上。

⑳　「思いやり」に関して詳しくは拙稿「日本的人間関係としての『思いやり』への試論」(『東海女子大学紀要』 第15号、1996年) を参照されたい。

㉑　この間の事情の原型に関して詳しくは、天沼前掲書、26-27ページを参照されたい。

㉒　同上、76-77ページを参照されたい。